

松本 薫

柔道家



「勝つ」ために戦い、結果も残せて
柔道人生に悔いはなし。
今は子育て、アイス作りに邁進中！

圧倒的な強さでロンドン五輪柔道女子57キロ級を制した松本薫さん。

対戦相手を睨む姿から“野獣”の愛称で親しまれていましたが、

今は、アイスクリーム事業に携わるかたわら、子育てに奮闘中です。

“野獣”はなぜ生まれたのか、アイスへの思い、子育て秘話など、

柔和な笑顔とともに語ってくれました。

Profile



松本 薫（まつもと かおり）

1987年、石川県金沢市生まれ。5歳のころから柔道を始める。金沢学院大学附属高、帝京大学卒。独自に編み出した“野獣戦法”をひっさげ、2012年ロンドン五輪柔道女子57キロ級で金メダル、2016年リオデジャネイロ五輪柔道女子57キロ級で銅メダルを獲得。日本を代表する柔道家として人気を博す。2016年11月に結婚、翌年6月に長女出産。2019年現役引退。現在は株式会社ダシースファクトリーにて“身体に優しいギルトフリーアイスクリーム”の製品開発から販売に携わる。二児の母。

高校2年で覚醒し、柔道で日本一を目指すことを決意

こどものころは金沢市の団地に住んでいましたが、手狭になり、小学生のとき、自然に囲まれた一軒家に引っ越しました。私は5人きょうだいの4番目で、いつも3つ下の弟と虫捕りや木登りをして遊んでいましたね。一緒に屋根に登って、家の前を人が通ると「ヤッホー!」と叫んでさっと隠れるなど、結構やんちゃなこども時代でした。

柔道を始めたのは5歳のころ。一番上の兄が習い始めたのがきっかけで、きょうだい順番に道場に入りました。ただ、かなり厳しい道場だったので、本当は私、行きたくなかったんです。でも母に「お菓子を買ってあげるから」と促され、つられて始めちゃいました（笑）。

柔道はずっと続けていましたが、先生が怖くてやめられなかったのが本当のところ、そんなに好きではなかった。高校生のとき、東京の“選手育成プログラム”に参加したものの、「強くなりたい、世界一になりたい」という目標を持った選手のなかで、私はひとり、全然意識レベルが低く、みんなが腹筋100回をやっているとき、私は20回やったらもう休憩。コーチは「自分の限界までやれ」と言うけど、私にとっての限界は筋肉痛にならないことでした（笑）。練習もさぼりがちで、ついに2年のとき「石川県に帰りなさい」と強制送還されました。そのとき「今が柔道のやめどきかもしれない。でも、このままやめたら、自分には何が残るんだろう」と考えたんです。出た答えは「後悔」でした。5歳から続けてきた柔道なのに、後悔しか残らないのだとしたら、きつろくな大人になれない。何かひとつでもいいから、柔道で自信を持てるようになってからやめよう。そう思ったとき、はじめて柔道に真剣に取り組む決意ができました。

その後はもうフル回転です。“日本一になる”という目標を立てて、勝つための柔道を目指し、戦い方を考えました。小さいころは豪快な柔道、きれいに投げる柔道に憧れて挑戦しましたが、しょっちゅう骨折やけがをするので「この体でそれを目指しても駄目なんだ」と納得。そこで、けがをするたびに理学療法士さんと一緒に対策

を練ることに。たとえば、膝をけがした試合では、集中力が切れたとき、お尻の筋肉が使えていなかったことが原因だとわかり、お尻を鍛えるようになりました。そんなふうにけがをするたび、勝つための柔道が分かっていったので、けがをすることは全然嫌ではありませんでした。

強い選手が怖かったからこそ自分が“野獣”になりました

2012年はロンドンオリンピックを目指していたものの、世界でなかなか勝つことができず、焦っていました。試合中も「才能のある人って凄いな、怖いな」と思うと自然と自分が怖い顔になっていきます。そのとき、アニメ『ドラゴンボール』の孫悟空のセリフが私に降りてきたんです。強い相手に向かうとき、悟空はよく「ワクワクしてきた!」と叫ぶんです。「そうだ、強い選手と戦うことは怖いことじゃない。もっと楽しんでいいんだ!」と自分に言い聞かせ、ニヤッと笑ってみたんです。睨みながら笑う私を見て、対戦相手は気持ち悪そうにしています。で、そのまま戦ったら、なんと勝てちゃったんです。ああ、こういう戦い方もあるんだ、と思い、以来、私は“野獣”になるこの戦法で勝つことができるようになりました。

ただ、当初は結構異端児扱いされ、「こんな私が日本代表になったら駄目なのかな」と落ち込むことも。そんなとき、ふっと、中学3年のころに母に言った「私がお母さんを世界に連れていく」という約束を思い出したんです。そうだ、あの約束を実行するために頑張ろうと思ったら、私のなかに太い軸ができて。そこからはもうブレることなく戦えて、約束通り母をロンドンに連れていき、金メダルを取ることができました。4年後は、父が「次はワシをリオデジャネイロに連れてってくれ」と言ったので、父のために頑張りました。リオでは油断して銅メダルになってしまいましたが、とにかく父母のために頑張ろうと思ったことで無事にオリンピックを戦うことができましたね。

結婚後も柔道は続けていましたが、やがて長女が生まれると、次第に私にとって柔道よりもこどもが大事になり、こどもとの時間を大切にしたいという気持ちが大き



くなり、引退を決意。ついに柔道をやめる日が来たと思ったら、晴れやかな気持ちでいっぱいになり、心残りは全くありませんでした。「やった、自由だ！」という感じで（笑）。引退会見では、いきなり「アイスクリーム屋さんになります」といって、皆さんを驚かせましたが、もともとアイスは好きで、「アスリートでも安心して食べられるアイスがあったらいいな」と思っていたんです。そんな話をしたら、今の会社の社長が共感してくれて、「ダシーズ ギルトフリーアイス」が誕生しました。まったく新しい世界での挑戦であり、子育てもあるので大変ですが、家族とも助け合い、仕事に育児に頑張っています。

柔道ごっこを通して こどもたちの成長を実感

19年には長男も生まれ、今は郊外の一軒家で、家族4人で暮らしています。私の場合、小さいときに7人家族だったせいか、いつも誰かが近くにいるような距離感が好きで、家を建てる時も広くなりすぎないようにこだわりました。一番好きな場所は2階にある広々としたクローゼット。アーチ状の入り口にはドアがなく、自由に行き来できるようになっていて、最近オシャレになってきた娘と一緒に「今日は何を着ようか」と選ぶのが楽しいひとときです。

それと、畳の部屋がどうしても欲しくて、1階のリビ

ングに畳の小上がりを作りました。ここではこどもたちとよく柔道ごっこをしています。こどもたちには教育の一環として柔道を教えているんですが、いつもいきなり息子が「お願いします」って私に挑んできて、それを見た娘が「始め！」と言うんです。挑まれたら受けなくてはならないので（笑）、私も真剣に戦いますが、日に日に上達しているようで、こどもの成長を実感しますね。

こんな家族との生活にありがたみを感じるからこそ、昨年、故郷である石川県を襲ったいくつもの災害には、本当に心を痛めました。被災地にも行かせていただきましたが、建物が倒れ、がれきが散乱し、私が見知っていた光景とは全く違う景色が広がり、ここで生活するのはどれだけしんどいだろうと、言葉もありませんでした。仮設住宅を回ってアイスクリームを配ったのですが、皆さん、住むところは提供されていても、憩いの場などなく、孤独を感じていらっしゃることも分かりました。今は「加賀棒ほうじ茶アイス」の売り上げの一部を義援金として寄付しています。直接できることは少ないけれど、義援金が、回り回って皆さんの復興支援につながったらうれしいです。

インタビュー動画は住宅金融支援機構（JHF）
YouTube公式チャンネルでご覧いただけます
https://www.youtube.com/playlist?list=PLcbOj07XtnfKA4_r_69-mElwHrGxjyKXI

